



賴光主從
丹波大江山
山登リテ
酒吞童子
ノ山寨ニ至







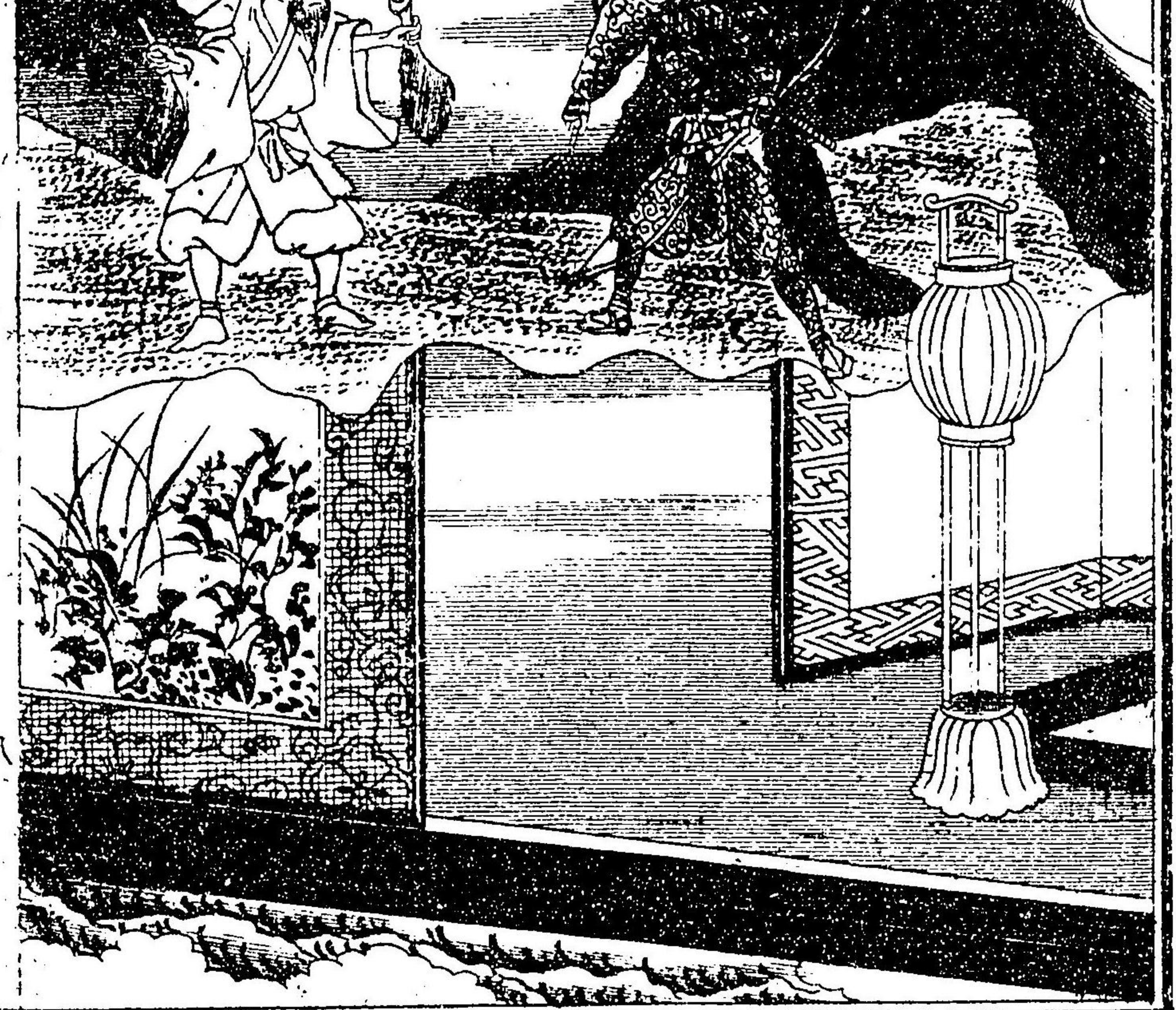
刺
 二衣洗女
 千丈ヶ岩屋
 ノ道ヲ問フ



天曆元年七月廿四日馬頭源滿仲今年
 平三才子婿で子を設けたまふ御母儀
 八近江源朝臣俊女なり御夫婦御親
 威の御喜び啓る物し諸候大小名
 門前市をなしける御祖父經基公は去る比より
 鎮守府將軍不補せられまひしが今年任限
 充て奥州より帰洛あり西八條殿においでし前夜御
 産の気がたたまひしが御安産男子誕生まじくたりと
 のと御喜びのめまり襦袢お押まといたるを經基手より
 御膝におち進らせん々々向ひのたまひけるは我齡六
 十に及び子ども多くもたぬも孫といふ者なりしゆ常
 事なりしゆ今男の子生るとも信と天下はらた
 事なりしゆ今男の子生るとも信と天下はらた
 事なりしゆ今男の子生るとも信と天下はらた



は人事を定めし次男と定め御猶子
 満成を嫡男とぞ冊を満成長する
 の多病にしてわづらひさせしに
 卒したまひ特は存生の間は天下
 して御猶子と袋をいさるる御評の
 事もたしめあはるる御評の
 ちられずともつて御評の
 養子たることを知すた御評の
 嫡子となせり満仲朝臣を御評の
 世事悉く頼光は譲り給ひ侍るは御評の
 たまふて人間有為のよしと心服
 銘に剃髪燈塗の形となり身と御評の
 心と無為遊む命終の曉来迎引を
 得んと念ひ日々道々祝髪望み御評の
 けれども満仲日満前と拾ば天下の士平
 怨みなき御評違乱の端あらん共



誰か汝を代へられを制せし頼光未だ弱年三
 不充て天内守護の相違ありんと
 見て望まはず旨勅許なけれを無據
 なく光陰を送り又思ひ返して我身の
 暇日ぬもせめて我子うち入出家せんと
 思立たまひ御子四人たじりも義
 丸四男十五戈容兒端嚴當時双びなく
 寸名進き中山寺とよみ善觀と尊僧
 に預けたまひ日を経て満仲のまよひ
 けるは久志く義大を見ず学問と
 勤めけるよやと召させざるに案よ
 相違二字とよ学びたまはず一向
 始めより放逸あれを源満仲朝臣
 醒ていささま我子ある善觀上人の
 置たまふおつて我意又行跡なりんと
 新よ使を添られ事の依頼候上



僧小用捨なく御意又任せ教へたまわう
 返されなる今は学びたまふと以ての
 まて昼夜山野小い鹿を獲てお水
 青稻をかり田畠荒し甚と狼藉なり
 縦逸して民家の兒女をいひに害し
 奉動十五戈の小腕にて為業とも見
 ざりり上人もあされとて近日得
 度をさしめ申さんと宣まを聞
 ます我弓矢の家も生なるのみ
 ほと腰刀と手とを何ぞ剃髪黒衣の
 茶とわん後かおて同宿伴僧にどか
 んとしたまふ大勢にて抱きとめ今
 詮方おしと父朝臣の方申上
 けれを父満仲頼藤原の仲光
 義大我命に背師が教をも用ひす
 不埒者暫く汝も預る仰せ畏つて



中山寺へ
 義大を
 向は行き帰り
 其後満仲朝臣
 仲光を召して義大
 が首切參るべしと
 始終悪事を仰せ含
 めらるれを仲光承まは
 り御上意ま候得とも
 未だ御若年まほませ
 を一旦の御誤りを強
 の諫言聞たまはず我家
 へ帰り右の旨逐一告
 進今更御後悔父上
 御憤り深く候わら曲
 て御剃髪時せつとまつて

大江山

と横川の源信僧都方へをとりまゐ
 らせ我子幸壽の首を身代り
 奉る仲光が忠告即実よあれ
 ありきて頼光はさんぬる比より
 國勢を行ひ難詠を決断し民
 の化は帰するを流れは従か本水の如
 九國を治り天下の武將然る郎
 従を扶助せつんば叶まじと先我
 も正治仲光季國滿雅の四を以
 治國平天下の功をなしたまは
 我も渡辺下部の兩條あり尚
 一兩人を加へば天下の事何ぞ怖
 畏るまと思らんや斯て天延三年十月
 廿三日の早旦綱季武を召して
 今夜不思議の告あり壁は信
 州確井と覺しき所は出て穢じたり



日也晩景とツも獲物もな去列卒
 を引むなしく帰らんとす時よ
 尾上より猪一足出来るを頼光とびち
 のへて引組草分を唯二刀まさし止め
 引上見れを猪の腹心のこあつて四
 足あしたましく得る者其身体
 具せざるも心ころよかぶ斯る處よ
 衣冠引緒ひる異人の白われは当國の
 諏訪の者汝がうら一腹心ありて
 未だ股肱をし汝又與ふるはれを
 以てすとして件の股肱を
 あへたまのま喜こび思ひ
 夢いさめ其吉凶いかど
 爰は確井峠に父子の者
 あり父年老て重病あり 粹年
 未雅はしとを枕邊は呼ひい言て



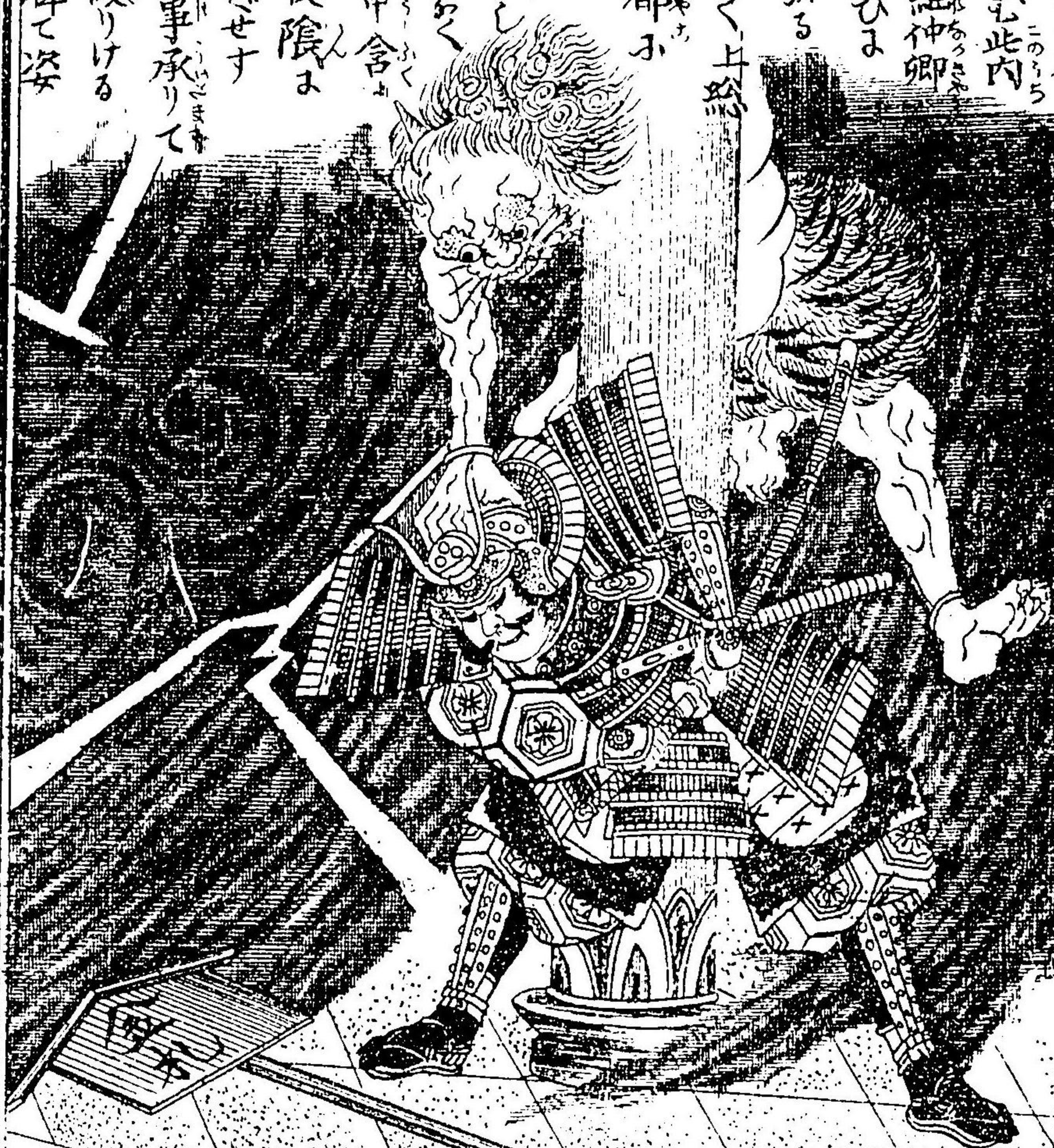
諸事懇ろに申含め程なく身まうぬ
 童子の父の遺言とよく胸中に籠
 忘るゝとなく盛長は徒がふて心よ
 思ふやう武勇あくんば家と興し名
 を顯はす事かたじけなくやばりやう
 山野よこ鹿猿を追ひ諸鳥を射手
 よも及ばぬ大石轉ばし切瑳瑠磨の
 功をつゝ人な勝れし異名も呼ぶ荒
 童子名を確井荒次郎貞道と号
 然るべき人は給仕せばやと報訪明神
 大願を起し上総国到り大守の御館
 不推参して案内をむ当番の青
 侍士出見を見るも蓋れあれる
 男中門より御身の誰ありと問へを
 信濃国の御内取つ二の女見参
 致し旨招入れ對面し事の様と君



言上しければ急ぎ具し参れと宣ふ故
 渡辺下部と引具して御前出諸問はせたまひ
 てささの賜ものあまのさへ御名一字
 賜り貞光と名のり綱季武と名を
 均しうし頼光朝臣の服肱とありし
 斯て朝臣任満ちて上洛の途足柄山ふりり
 嶺眺望し雲先考へ老姬童を見て
 主従の盟を約し名を坂田公時名
 乗綱季武貞光公時四傑の外よ
 何を加ふ事あらんと喜び玉ふ
 京都よ天延三年の秋始めより天宮
 珍事なる見られ司四年の春種々
 の天怪出来て洛中高家いさらなり某
 公達公武の貴族三四入失せたまふ
 斯てハ玉体に近付奉りいるある
 事しと思怖る清涼殿まで仁王



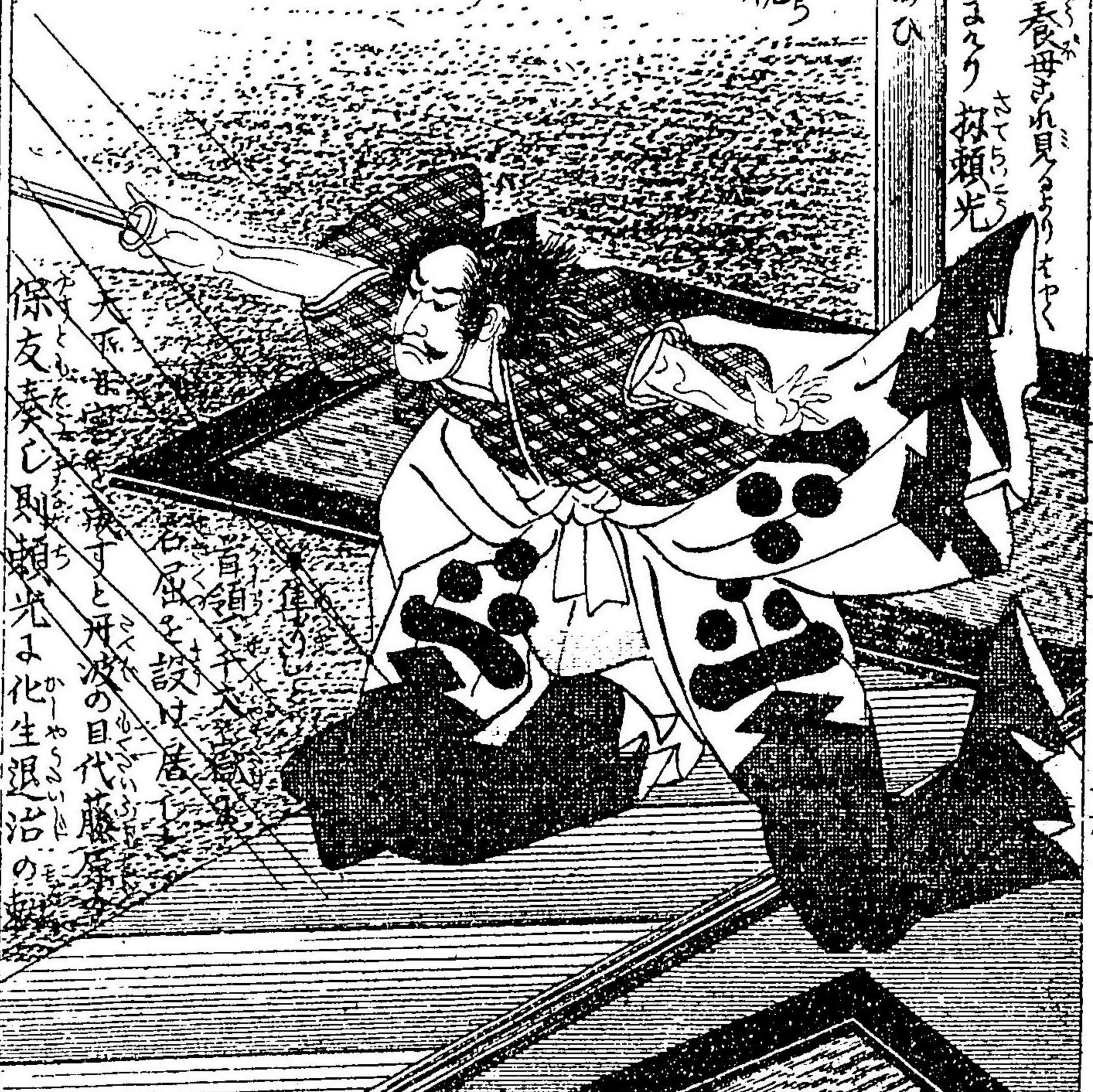
會を修せしも尚諸國の英雄大小名
 も仰せて禁門の警固をせしむ此内
 源の朝臣頼光うつて中納言維仲卿
 御息女を見初うけいなと思ひま
 焦今中々まいひも放たで信農ある
 木曾路の橋を懸たるや程あへ上総
 守にて年を経て昨日の暮都小
 上りたや禁廷に宿直未だ
 其ぞともおぼしまあも心苦し
 く覺束あく細ハ少より心置あ
 召遣ひたまひけれを密りに申合
 め一條大宮ある所あうせしる夜陰ま
 及び縁ま忍の使ちれを供をもせす
 彼所に行て細ま申傳へ御返事承りて
 帰り途一條の堀川の炭橋を渡りける
 時齡せやばりの女肌の目よ輝て姿



貴なるが持人をも具せず只ひとり
 南へ向ひくを行けれを近づき寄
 てをも和女はいつくにおいする人をと
 向むよ女答へてこれら五條巨不
 侍りし夜あけ恐ろく送り賜
 これと馴々しくかける綱ハ心よ思
 ひたるは当時浴中怪異ありと上
 夜陰の往來絶たる頃女の身として
 唯獨り何様癖者あらんと近
 づく女を同行し堀川行き今や
 正親所へ二段ほどよく出ぬとふ
 どもろにて後見より我が住所都
 の外なるをれまて送りたひあや
 かけれを承りしひぬづくま心も送
 参せんといとひとしく夜をかへる
 一げある鬼とありいざ我行所ハ愛宕山



母ら三顔を見れば是非多く出し養母を見んよりせやく
 一丈あまりの鬼とあり空より腕を持失せまなり頼光
 朝臣はと大執つ汗湧か如く甚く悩みのひ
 四天王をせめて近習の面々思を失ひ百
 葉を服すも其功多し三餘日を経朝臣の枕
 辺は一人の僧現る千筋の繩を擱きて公
 をりらめんと仕りりる公がそと起り
 憎さつと切付化生の其まふ失より
 其六音は四天王の者ども我れくと支り
 参り何事ととありを見るに血
 ぬれあり其跡を松明てらし行ほど
 は北野の社のゆるる血の跡止塚を
 づづいて高方と手とけ引出せむ
 瘡物起るかりし七尺斗りの蚊
 口は炎をとき千筋の糸捲
 倒さんと遠めをのりらむ



大平... 丹波の目代藤原... 係友... 則頼光は化生退治の...

とり永祿二年春都鄙の男女
 啼哭する聲家々哀あり
 大江山は城をりま
 遊徒



あつる終夜
 丹新を焼く
 十都あてい
 妖鬼退治
 諸社寺にて
 秘法を脩せらる
 といひ長男判官下野源頼国右
 京大夫藤原保昌瀧口渡辺綱切解
 由判官... 部季武主馬佐酒田公時... 頼負尉
 確井貞光其外家人都合千二百余騎正登
 元年三月廿二日丹波の国大江山へ発向する其日
 は拘子ヶ嶽打越し無根切過たまのとき何と
 俄うよ心地憎まき様覺へて馬の進を難けれ

保昌進出公御顔勝れず見へさせぬと今日
 様におどく覚れ暫く御退陣と旅館を
 し宿し朝臣少睡眠夢中の告あり抑千太
 獄の勢必ず勝利をばし神力佳吉明神
 路の案内を附せらるべしと夢い覚めぬ
 是より下野判官頼国を大将とし大江
 山を攻む公綱季武公時貞光保昌
 上下六名あて山伏修行の行跡少く出
 立至る旅の直愛を尉め廿五日後国叢祖
 へ行善ぬ當社の法師社頭御燈まらせて
 と来る故季武稍御坊あれいりある神まほ
 くやと向へを法師あは當国宮權現住吉の
 神と御同体と云すく帰らんとす頼公僧を
 呼止めを去頃より此山の奥に鬼神住夜
 山々郷々出入を害す故足も早帰り命
 活延んと修行を只管は當り宝殿を奉納



祈願致くと綱公の言を承り退後
 宝殿を納めて人々社祠は通夜祈
 あじたり夜すては明主後奉幣し神
 前と出行も道を知らず煩ひし時怪
 げある男急劇道を急ぎて行をるま
 綱和殿の何地へおする人をさかへ伯耆
 の大山へ詣する者山道は踏迷案内し頼
 公彼男痛ばき僧達無進なき事
 使ぬ水も捨て馳行を綱は時止知ぬ途を
 程せよ直事いけまじあられ所具したまは積か
 足を限り歩て妨げあさるる人踏さるる野
 出合しも値遇るよめ道すと六人の口々これ
 然れを歩きたまへは後ま續て行程
 ぶ此奥は千天と楯岩窟彼所へ手あつとのたの
 く心中ま喜ひ夢中示現いざあられまへ
 道のけんをとしのさ岩窟屋ま至り天童



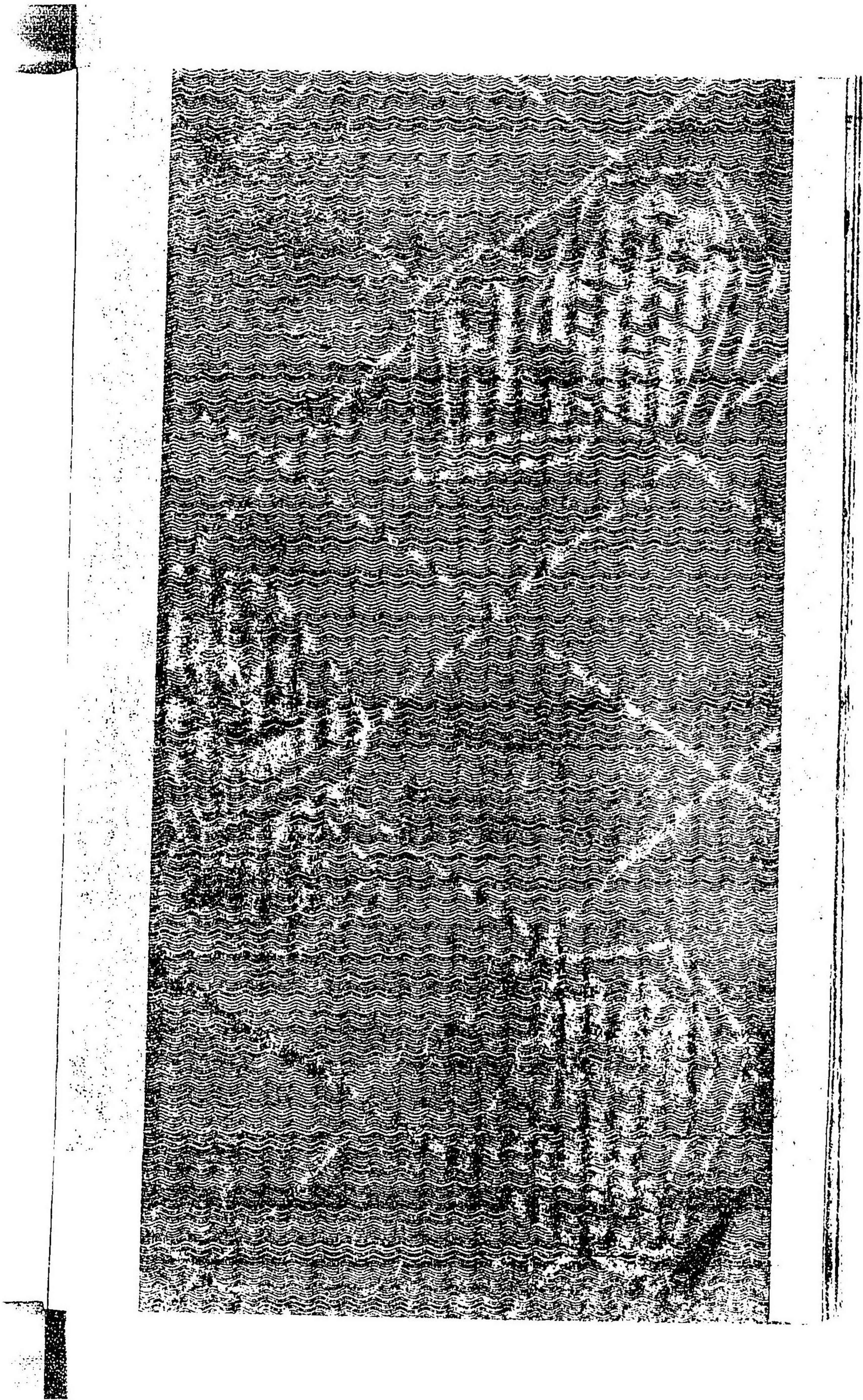


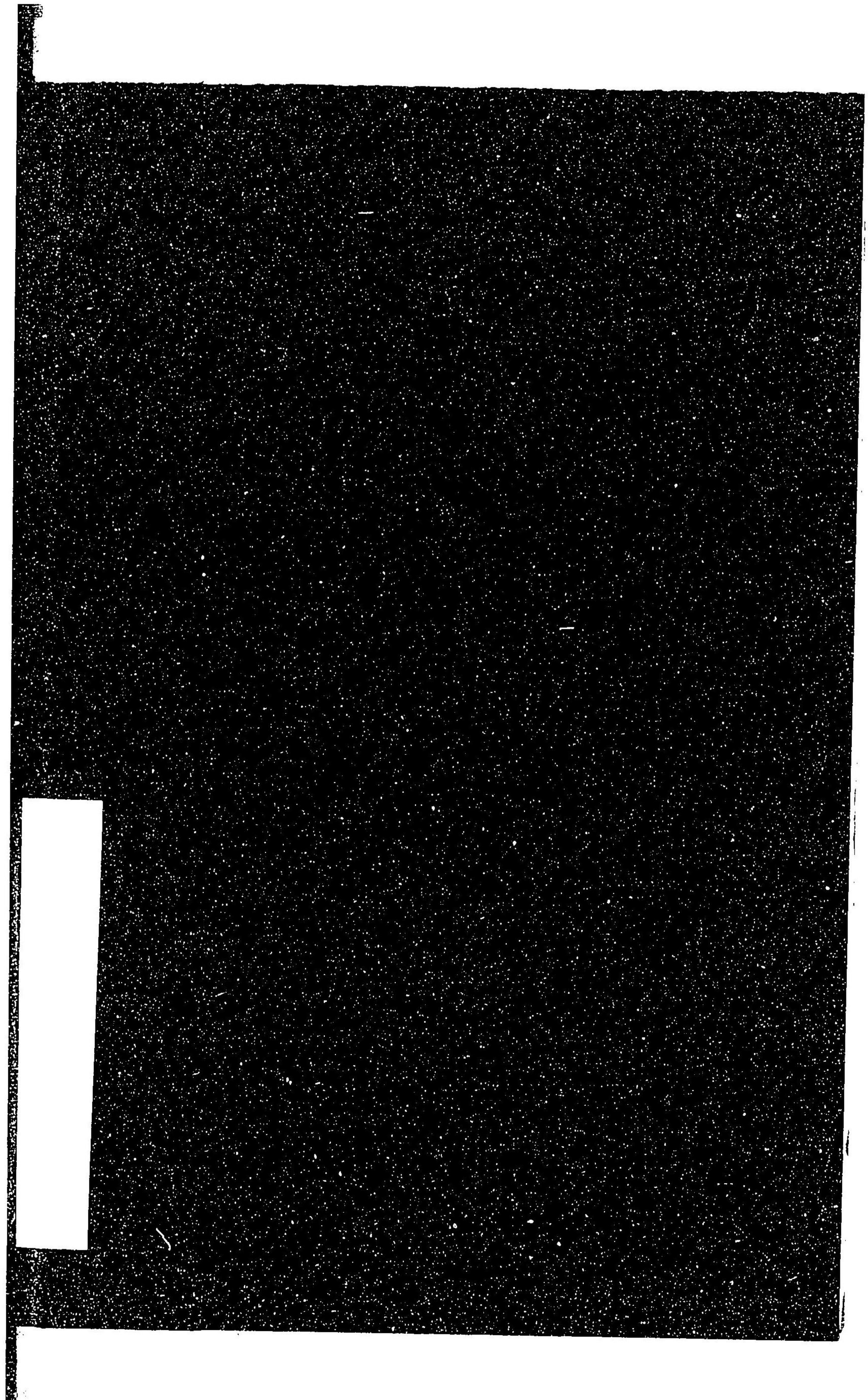
子對面あり童子と共に酒宴為し
 夜も更童子も其場を酔臥し小
 賊も既にふしたれを頼公機能と
 心出思ぬ程に殿居小賊や旅僧
 達臥戸を介体ぬと案を引まて
 一間に入れ嚴き締頼公思ひ
 ま破り出てか多の賊目とさほしてハ
 大事と各々仕度とつて頼光
 はく酔し水一を賜れと云を
 殿居のり水を持来り締と明
 て合を公目之をりあせむ網
 ひき組し其向馳出ぬひ早も
 童子の首をおと落せむと
 恐るまきゆり搦まなり渡る小
 賊らあてて出さるる来とわ
 振ハ鬼賊退治国司よのつ



其夜退田ありて明る朝岩窟をい
 の一を兼子て公従ふ者よりませ入
 りにあり五十人と公の御身の上心もと
 と待受より扱も大江山寄手童子が首
 鋒先は貫き陣頭は先立られ城
 首を見てと落と落し賊の大將今
 是迄と落残りし賊徒十余人を
 其城門をむらさ戦ひこも
 終おとり目出度がいんあ
 このふ是酒吞童子とせし
 一世の勲功比類なき各将賞
 賜り寛弘年中陸奥守鎮守
 將軍に任せられたまひ
 治安元年七月廿日薨じ
 成り成り成り成り成り

明治廿一年十一月三日印刷
 全 年 全 月 廿 日 出 版
 日本橋區龜井町世五番地
 著作被發行着 澤久次郎





特49

874

大江山鬼賊退治

国立国会図書館

092329-000-1

特49-874

大江山鬼賊退治

沢 久次郎 / 刊

M21

DBP-1918

